
LEGEND KNIGHTS

LEOPARD

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

LEGEND KNIGHTS

【Nコード】

N7189S

【作者名】

LEOPARD

【あらすじ】

タイトル変えました【前は私立十色高校成績勇者伝説です。】

都内でも随一の進学校、私立十色高校そこでは頭の良さが学校での扱いに比例する。そんな学校のとある一人の少年の話……

駄文です。台詞が多かったりします。読みにくいかもしれません。携帯なので更新は不定期です。それでも暇つぶし程度でもいいんで

読んでくれたら光栄です。

バカとテストと召喚獣、サモンナイト、DOGDAYSのキャラ
は登場しません。

プロローグ

私立十色高校、そこは成績優秀者が全国から集まる都内でも随一の進学校。

そんな天才が集まる学校の校門の前に俺、佐野一樹さの・かずきはいた。

「はあ、ついに始まってしまった新学期。さよなら俺の春休み。」

そう、俺はこのエリート学校の生徒。そして、今二年生になってしまったのだが…

「それにしたって新学期初日に遅刻はやばいよな。」

新学期早々俺は遅刻したのだ。

「どうしたものの、やっぱり正直に謝って、入れてもらうべきか？ いやここはこっそり忍び込んで……」

「よう！！元気してたか？」

「す、すすすいませんでした！これには訳があつて、えっと、その……」

「ククツ、お前も相変わらずだな。」

「ん？……つてお前竜司じゃないか！！ビビらせんなよ。」

彼は伊藤竜司いとうりゅうじ、俺の幼なじみでもう小学校から10年の付き合いになる。

「ういつす、お前も遅刻か？」

「ああどうやって切り抜けるか考えてたんだよ。」

「そんな決まってるだろ。いつもの手を使うんだよ。ついて来い。」

「？」

俺は意味が分からなかったが、とりあえずついて行った。

「すみませんしたっ！」

「結局土下座かよ!!！」

最終的には職員室で土下座だった。

「新学期早々遅刻とはいい度胸してんな。」

と俺達に説教をしているのは、去年の担任の原川先生だ。
この先生は一年の時から、お世話になっている。

「いやあ、照れます。」

「褒めてないからな。」

「まあ聴いてくださいよ先生。」

「何だ？」

「俺達人助けしたから遅刻したんですよ。」

「はっ！？俺達人助けなんか、ぐむっ！？」

（いいからあわせろよ。）

竜司は俺の口を塞ぎながらこう囁いた。

「ん？どうした？」

「いやなんでもないですよ。」

「そうか？……で人助けってなにしたんだ。」

「えっと……か、怪人に襲われてる子供を特撮ヒーローに変わって倒したり。」

竜司……作戦ってこれか？いくら何でも無理があるだろ。とか俺は思ったけどあえて無視した。

「あとは？」

「う……」

「う？」

「ウ。トラマンに変わって怪獣を倒したり。」

「ふう、分かったよ。今回は見逃してやる。が次はないからな。ほらクラス分けのテストあるから早く行け。」

原川先生は呆れていた。まあそりゃあそうだよな、言い訳にしちゃあ見苦しすぎるぞ竜司。

「はい、じゃあ俺らはこれで失礼します。」

そうして僕達は職員室からでた。

「はあ、お前ムチャクチャだろ。」

「まあそう言うなって、俺だって原川の奴がああもあつさり諦めるとか思ってたからな。」

「いや、呆れてるだけだろ。」

「気にすることじゃねえよ。今は遅刻の説教されなかったことを素直に喜ぼうぜ。」

「そうだな、まあ説教逃れても結局は地獄だけだな。」

「ああ、クラス分けのテストか。」

説明しよう、我が十色高校はクラスを分けるために、学年の始めにテストを受けるのだ。（一年は例外）
テストの成績優良者からA、B、C、D、E、Fの六つのクラスに分けられるのだ。

さらに、成績が良いクラスほど待遇がいいというまるで学歴社会そ

のものだった。

ちなみに俺達は一年だったので関係なかった。

がしかし今年は待遇の良いAクラスに入るためにも、今年はクラス分けのテストで絶対に高得点を取らなければいけないのだ。「じゃあ竜司、お互い頑張ろうな!!」

「おう、じゃあな!!」

こうして俺達は無事テストを受けることができた。

数日後

「テストの結果発表か。」

俺はまたしても正門の前で待っていた。とはいっても遅刻したわけではない。クラス分けの発表は正門で行われるらしい。そして、ついに俺の番。

「おう、一樹か。」

「原川先生!？」

クラス分け発表の封筒を渡してくれたのは、原川先生だった。

「一樹、俺はいままでお前のことをバカだと思ってた。がしかしそれは間違いだった。いままですまんかったなあ。」

俺が恐る恐る封筒から中身を取り出したその紙に書いてあったのは、

「お前は正真正銘バカだ。大バカだ。」

ただ一文字大きくFと書かれていた。

「そんなあああああああ！！！！！！！」

俺の虚しい叫びが学校にこだました。

プロローグ（後書き）

作者のLEOPARDです。

読んでくださった方

ありがとうございます。まだ物語は始まったばかりで

これからも駄文で

頑張っていくので、

お付き合いしていただけたら、

ありがたいです。

これからもよろしく願います。

episode 1: ネット世界【ヴァルハラ】

どうやら俺は学年でも群を抜いて点数が悪かったらしく、学年最下位らしい。がこんな学歴社会を絵にしたような学校にも救済措置はあるらしい。

「おい、一樹。お前LGに参加する気ないか？」

俺に話しかけてきたのは竜司だった。

「竜司！？お前ここにいてことはまさか……」

「その通りだよ。俺もFクラスだ。」

「そうだったのか、早く言ってくれよ。」

「悪いな、でLG参加しねえか？」

「参加もなにも俺最下位だし……」

「だからだよ。お前に失うものはない。学年順位だって一番下。見上げるしかない。最下位の時点で大した誇りもない。」

「!!--!」

「だったらここは一つ頭のいい奴らに一泡吹かせてやろうぜ。」

「……………よし乗った。やってやろうじゃないか。……………で実施期間っていつだっけ？」

「今日の一時限目からだよ。早くエッグルーム行くぞ。」

というわけで、ウチの学校にしかない特別施設に来たわけだが……

「人が多いな。」

俺達は人混みに揉まれていた。

「そりゃあ成績下げられたくないからな。参加せざるを得ないだろうよ。お前みたいな最下位以外は。」

周りでは女子が「誰よ、いまあたしの胸触ったの!!」とか言っている。

ずるい、俺と代われよ。俺の周りムサイ男子だけだぞ、クソッ。

「おっと、やっと出て来やがったぜ校長が。」言われてよく見てみるとそこには校長が立っていた。そして……

「いいか、お前らあああああ!!!!!!」

叫んだ。

「よおおおく、聞け、バカどもおおお!!!!!!」

校長、せめて足をもう少し閉じましょうよ。せつかくの美貌が台無しですよ。

「よし、じゃあ早速『legend grade』通称LGを始めるが、その前に一応ルール説明するぞ。」

生徒自由参加型成績競争戦。『legend grade』はネット世界でRPGをやってもらう。

現実世界のが知力がHP、賢さがMPになる。学年順位が高いほど上位職、低いと下位職を選択することができる。

モンスターを倒すと経験値が入りレベルアップする。レベルアップすると現実世界の知力、賢さが上がる。

他のプレイヤーを戦闘によって倒すとこれも経験値が入りさらに倒した相手の現実世界での知力、賢さを奪うことができる。

知力、賢さが上がったり奪ったりして学年順位に変動があった場合は、職業レベルが上げられる時もある。

例外的に学年トップ5は強制参加だ。

変わりに現実世界では絶対的な権限と豪華設備Sクラスの使用が許可される。

実施期間は、学期末試験全学年の全生徒の採点が終了してから開始して、学年トップ5以外のプレイヤーもしくは学年トップ5がネット世界で力尽きた時点で終了。

ネット世界は学年ごと区別されている。

参加方法は十色高校のみに存在する、

科学技術の粋を集めて造られた体感型ネットPC、

通称『エッグ』その『エッグ』が集まるエッグルームで『エッグ』に乗り込み参加する。

ネット世界で受けたダメージは、現実世界のプレイヤーも受け疲労もするが傷はできない。

ゲーム終了時にHP、MPに変化があった場合、

終了時『エッグ』から脳に特殊な電磁波が送られ体力、知力に反映される。

現実世界での一分がネット世界での一日となる。

ネット世界での戦闘が続いている間参加していない生徒は自習とする。

以上！！質問はあるか？無いならさっさと乗り込め！！」

その一言とともに、全員乗り込んだ。

乗り込むとスピーカーから案内音声 flowed。

『体感型ネットPC『エッグ』へのご搭乗ありがとうございます。
只今からPCゲーム『legend grade』を開始いたします。
まずお名前の入力と性別、職業を選択してください。すべて口頭で
結構です。』

「えつと名前は佐野一樹、性別は男、職業は……なにがあんの？」

『勇者はもちろんのこと、魔法使い、武道家などいろいろな取り
そろえております。』

「へえー、じゃあ……この召喚戦士つてのにする。」

『わかりました。では佐野一樹様、これからあなたは、広大に広がる
ネット世界『ヴァルハラ』に旅立ってもらいます。ではよい旅を
……』

こうして俺はネット世界に旅立った。

のだが、

「……てめえだれだ！？」

目の前にはすでに別の敵プレイヤーがいた。

「心外だな。この僕のことを知らないだなんて。」

「いいから俺の質問に答えるよ。」

目の前の男はとてつもなく不気味だった。

「ねえ君、無知は罪だと思わない？」

「質問に答える……！」

「罪には罰を与えなきゃね。」

気づいたときには目の前にいたはずの男が後ろにいた。

「っ……！」

「身の程を……知る……ことだね、坊や。」

直後、俺は気を失った。

目が覚めるとそこは、木造の家の一部屋のベッドの上だった。着ていた鎧と武器の剣はすぐ隣に置いてあった。

「……………ここはどこだ？」

「勇者様……………」

声がした方を見るとそこには俺と同じくらいの少女がいた。しかしその少女には頭の上にイヌ(?)の耳と腰には尻尾があった。

「勇者様がお目覚めになりました！皆さん、お出迎えです！！」

「おおー！！」

「本当か！？」

とどこからともなく、人々が押し寄せてきた。押し寄せてきた人々にも、耳と尻尾があった。

全員（？）が集まるとさっきの女の子が口を開いた。

「勇者様、ヌグイッド村にようこそ。勇者様、早速で申し訳ありませんが、お願いがあります。」

（えっ？なにこの感じ。）

「勇者様、この村を救ってください。」

「とりあえずおやすみなさい。」

「待つて、いきなり寝ないでえええ、てか人の話は最後まで聞けえええー！！」

「わかった、わかりました。聞きますから、…であんた誰？」

俺はベットから起きあがり女の子に向き直った。

「…………こほん、私はここヌグイッド村の領主を努めています。パ
ラオ・ソイツシュです。」

「じゃあ……」

「ここはヴァルハラの西に位置する小さな村、ヌグイッド村です。」

するとパラオは地図を広げだした。

「地図で言うならこのあたりです。」

パラオは地図の左側の端を指した。

「この真ん中にあるのは何だ？」俺が地図の真ん中にある城みたいなのを差して訪ねると、

「そこはヴェノム城です。ヴァルハラの中心となる場所で、そこを中心に方角も決まっています。」

「誰か住んでんのか？」

「魔王が住んでいます。その魔王のことについてお願いがあるのです。」

「まさかだけど、倒してきてください、的な感じですか。」

おっかなびつくりに訪ねると

「いえ、そこまでしるとは言いませんよ。えっとお願いって言つのは、魔王が解き放っている魔物の討伐をお願いしたいんです。」

なんかショックだけど気にしない、一樹気にしないもんね。

「……と言いますと？」

パラオは少し戸惑いながらも話してくれた。

「魔王はヴェノム城の周囲に防護のために魔物を解き放っているのです。基本はどの街も村も、聖獣による加護を受けていて、村まで魔物が来るのがなかったのですが、何故か近頃は村の近くまで魔物が来るようになってしまったのです。」

「待て、聖獣って何だ？」

俺が訪ねると、

「知らないんですか！？ 聖獣は東、西、南、北にそれぞれいる神の使いですよ。」

パラオは驚きながら答えてくれた。

「四聖獣みたいなもんか。」

「?… よくわかりませんが、
北はアクアートル、
南はバーンフェニックス、
東はライジングドラゴン、
西はストームタイガーが
守っています。」

我々はストームタイガーの加護を受けているはずなんですが……」

「魔物による襲撃を受けていると……」

「そうなんです。で、その魔物を……」

「倒して欲しいんだな。」

「はい、察しが早くて助かります。お願いできますか？」

パラオが上目遣いで頼んでくる。

「それはいいんだが、」

「ありがとうございます！！」

俺はいままで触れなくても触れさせてくれなかった話題を出す。

「何で俺が勇者なんだ？」

「あつ、それはですね私の村の占い師が予言したんですよ。」

『我が村には災厄が訪れる。がしかし、その災厄を打ち払う白髪の男が現れるだろう。』

つて言つてたので、おそらくあなたがその災厄を打ち払う男の人、つまり勇者様だろうと。」

今更ながら説明しておく、俺は髪が白い。親の遺伝の関係で真っ白だ。

「……………なるほど、状況は理解できた。」

「そうですか。良かった。」

「俺はこういう星の元に生まれてしまったのだろうか？だとしたら不幸すぎる。だけどあんな顔されたら断りずらいし……………ブツブツ」

「何をブツブツ言ってるでありますか？」

「あついや、なんでもないよ。で俺はなにをすればいいの？」

俺はとっさに営業スマイルでかわした。まさかバイトで習得した特技がここで役立つとは……

「とりあえず、魔物と交戦中の近衛隊長のネフルに合流してくれませんか。詳しくはネフルから説明があると思いますから。」

「ネフルだな、分かったよ。じゃあいつちよやってみますか。」

こうして僕は勇者として村を救う為にネフルのもとへ向かった。

しかし僕はまだ知らなかったのだ。この行動がどういう意味をもっているのか……

episode 1: ネット世界【ヴァルハラ】（後書き）

どうも作者です。episode 1: ネット世界【ヴァルハラ】を読んでくださった方々、ありがとうございます。

こんな駄作者の駄文を読んでくださり、恐縮です。感謝感激雨霰です。

今後は、もっと駄文じゃなくなるよう努力していく所存なのでこれからよろしくお願いします。

そして徐々にですが後書き使って、キャラとの対談とかやろうと思ってます。

そちらもお楽しみに。

では今回はこのくらいにさよなら。

episode 2：近衛隊長ネフル

一樹は又グイッド村の外れにある森を駆け抜けていた。

「やってみるとは言ったけど…」

そう、彼は又グイッド村を魔物から守るために、こんな場所に居るわけだが

「いったいどこにいるんだよおお！！！！！！！！」

肝心の近衛隊長ネフルの姿が見つかっていなかった。

「パラオの奴、森に行けば分かるとか言ってたけど、ぜんぜん見つからねえじゃんかよ！！」

とそんなことを言っていると、どこからともなく何かが一樹の足元に落ちた。

「うお！！なんだこれ？」

一樹が足元に落ちたそれを見ると、それはジュワジュワと音を立てて地面を溶かしていた。

「粘解液か！？こんなの浴びたらイチコロだな。」

そんなことを言った矢先たくさんの粘解液が飛散してきた。

「ヤッバツ！！」

一樹はとにかく走った。走り続けていると目の前に、一本の鋭く長い蒼い角をもつ馬（？）に乗った女の騎士がいた。騎士にはパラオと同じでイヌ耳と尻尾がついていた。一樹はとりあえず助けを求めた。

「ちよつ、助けて!!」

すると騎士の女は馬に乗ったまま一樹の首に槍を突きつけた。

「貴様所属は？」

「所属？そんなの知らないよ!!」

「そうか、それは残念だ。じゃあな。」

「待つて待つて!分かったよ。ヌグイッド村に魔物の討伐を頼まれた勇者佐野一樹です。っていうかまずは人に名前を聞く前に自分が名乗れよ。」

「!!勇者様でありましたか、これは失礼した。」

そついうと彼女は槍を仕舞い、馬から降りて倒れていた俺に手を差し伸べてくれた。

「申し遅れました私はヌグイッド村近衛隊長のネフル・ヴィラと申す。」

俺は彼女の手を取り立ち上がった。

「あんたがネフルか、意外だな。」

「なにがですか？」

「いや俺は近衛隊長ってパラオから聞いてたからてつきり男だと思っ
つてな。」

「なっ！？失敬な！！女だからと言ってなめないでいただきたい。」

「いついや、そうじゃなくって女が隊長やるなんて凄いと思ったん
だってばー！！」

「そっ、そうですか。」

ネフルはまんざらでもない感じで頬を赤らめていた。

「で、パラオに行けばネフルが教えてくれるって言われたんだけど
…」

「そうでしたか。では、村が魔物に襲われてるのは理解してますな。
」

「ああ。」

「我ら近衛隊は村を襲撃する魔物から村を守ってるのです。そして
ついに奴らの拠点を見つけたので今度はこちらから攻めているので
すが……」

「兵力の差は歴然か…」

「そういうことです。だから勇者様には助太刀を願いたい。」

「言われなくてもそうするさ。さて行きますか。」

「そうですね。」

「行く前に一つ、敬語はやめてくれ。一樹って呼んでくれ。」

「わかりました。」

「わかった、な。」

「わ……わかった。」

「さあ改めて行くぞ。」

「先導するついて来い!!」

「ちよつ、待った。俺の馬は？」

「ユニコールのことか？お前見たところ召喚戦士みたいだが、召喚契約してないのか？」

「なんだそれ？」

「知らないのか！？……仕方ない。」

ピーー

ネフルが口笛を吹くとどこからともなくもう一匹、ネフルのとは角

の色が違う透き通った翠の角のユニコールと言われる馬がやってきた。

「召喚契約にもいろいろあつてな。」

ネフルはユニコールの背に触れると俺の方にユニコールの頭を向けた。

「この尖角獣ユニコールとの契約方法は頭の角と自分の武器を交えることだ。やってみろ。」

「こっか?」

俺がユニコールの頭の角に剣を交える。

ガキンッ!!

すると目の前のユニコールの体が見るみる薄くなっていく。

「うお!!消えてる。」

ユニコールは完全に消えてしまった。

「サモンしてみろ。」

「サモン?」

「やっぱり知らないか。教えてやるからよく見てろ。」

ネフルは自分の乗っていたユニコールに触れると体が見るみる薄く

なっていく。完全に消えたところでネフルが説明してくれた。

「サモンするときは、サモンしたい場所に手をかざして、」

ネフルが自分の横に手をかざす。

「サモン！！尖角獣ユニコール。」

ネフルが叫ぶと彼女の横にユニコールが再び現れた。

「おお！！」「今みたいにサモンの後に召喚する召喚獣の名前を叫ぶ。他にもいろいろあるがとりあえずやってみろ。」

俺は言われたようにやってみる。

「サモン！！尖角獣ユニコール。」

すると俺の横にもユニコールが現れた。

「分かっていると思うが、召喚契約していない召喚獣は召喚できない。」

「どの人も召喚はできるのか？」

俺が尋ねると

「いや、全員はできない。できるのは一定の階級の人と召喚戦士だけだ。」

「一定の階級って？」

「隊長以上だ。そろそろ説明はいいな。早く行くぞ。」

「おう、わかった。」

俺達はユニコールに乗ると、魔物の拠点に向かった。

「ここか？」

「ああそうだ。」

俺達の目の前には盛り上がった土があつてその中心に大きな穴があった。

「ここに入るのか。」

「ああそうだぞ、何か不服でも？」

「いや、ないけど……」

そんなことを言っていると、周囲の木から粘解液が飛散してきた。

「かわせ!!」

俺はネフルに押し倒されてなんとかかわした。

「くっ、なんなんだよ!!」

「ウォームだ。私たちはこいつらに村を襲われたんだ。ほら降りてきたぞ。」

周りを見るとワゴン車と同じくらいの大きさはあろうかと思われる芋虫みたいなものがいた。しかし芋虫とは似ても似つかず、口の周りには歯のような針がびっしりついていた。

「うわっ、キモチワル!!」

「そんなこと言ってないでさっさと倒せ!!」

「倒すっただってどうやって!!? あれに真っ向勝負挑めっただけ!!」

「ああゝもう!! とりあえず伏せろ、ヴィラ流槍術奥義…」

「待った……」

「狼王旋風!!」

俺の言葉を待たずにネフルがなにかを放った。すると周りの木とともにウォームが切り刻まれて中の内蔵みたいなものを撒き散らした。

「これで一掃できたな。」

「馬っ鹿野郎!!! 当たっただろうすんだ。なんだいまの!!」

俺もさすがにキレた。

「貴様奥義も知らんのか!? まったく……これが終わったらじつち

やんのとこでこつてり絞らんといけないな。まあいい、中にはいるぞ。」

「ちよつ待った、ユニコールはどうすんだ？」

「ああそうだったな。ウエポンチェンジ“武器変換”！！」

そう言うとなフルの槍の両端がが針のように尖り一本の細長い棒になった。

「こんな風に召喚獣を武器に変えることもできる。お前もやってみろ。」

俺はネフルが言ったようにやってみる。

「ウエポンチェンジ！！」

すると俺の剣が渦巻きドリルの形になった。

「これで巢の中にも連れていけるのか。」

「そうだ、さあ行くぞ。」

そう言っとなフルが中に入っただのでおれも続いて入った。

これから迫り来る脅威も知らずに……

episode 2：近衛隊長ネフル（後書き）

LEOPARD（以下LEO）「どうも作者です。今回はなぜこんな風に力ガツコがついているかと言いますと、いろいろ事情がありました、前回のあとがきに書いたとおり、キャラとの対談をやってみようと思ひまして、思ひ切つて読んじやいました。それじゃあ張り切つて読んでみましょう。佐野…」

一樹（以下一）「前振りなげえんだよ作者！！」

LEO「いいじゃんか。俺これくらいしか出番ないし」

一「けつ、さつさとしやがれくそ作者！！」

LEO「……くそつて言つた。……俺のことくそつて言つたよ。」

一「あーメンドクサ、作者様々お願いします早く進行してください（棒読み）」LEO「さあ氣を取り直して行きましようか。」

一「立ち直り早っ！！」

LEO「じゃあまずはプロフィールからいつてみよ。」

一「佐野一樹、年齢16歳、血液型はO型、身長167・4？、体重51？、誕生日は12月7日。」

LEO「続いては今回この作品の主人公に抜擢されたことについて何か一言。」

一「抜擢も何もお前が作つたんじゃねえか。」

LEO「堅いこと言わないの、じゃあ生みの親に一言。」

一「死ぬ。」

LEO「……生みの親に死ねつて言つたよ。……あたしはあんたをそんな子に育てた覚えはありません。」

一「メンドクさいから帰る。じゃな。」LEO「ああちよつと。……」

……行つちやつたよ。仕方ない、今回の対談はここまでです。ではまた次回に会いましょうサヨナラ。」

収録後録音音声

LEO「ギャラいくら出んの？……はっ！？話違っじゃん！おい
ディレクターどいうことだよ。はっ！？なに？マイクつけっぱ！
？……マジで？……読者の皆さんさようなら。」

episode3：ヒーロー参上！！

俺とネフルは穴の中に入ったわけだが、

「便利なもんだな。じゃあ奥義はその生命力を変換して撃ち出すわけだな。」

俺は“奥義”の説明を受けていた。

「そうだ。このカンテラにも生命力が使われている。世界が生命力によって回っているといっても過言ではない。」

ネフルの手にはカンテラがありくらい穴の中を煌々と照らしていた。

「ただし、使いすぎは禁物だ。ぶっ倒れるからな。」

「生命力はどうやって作ってどうやって物に与えるんだ？」

「生命力を練るのも与えるのも一朝一夕でできるような賜物じゃない。修行が必要だ。」

「ええゝ教えてくれたっていいじゃん。」

「はあ、わかったよ。まずは前進を集中させる。」

「おう！」

俺は全身の神経を集中させる。

「そしたら、その集中力を一点に集中。そしたらそれを外に放出する。」

「ふん!!」

やってみたがさっぱりだった。

「集中力が足りんな。やっぱりじっちゃんのとこで修行確定だな。」

「ええ。」

「ほら先に進むぞ。」

俺達は着実に巢の奥に進んでいった。がそこで異変に気づく。

「……………おかしい。」

「何が？」

「いい加減ウォームの一匹ぐらいと接触してもいいと思うんだが……」

「いいじゃん接触しないに越したことはないんだしさ。」

「そうだが、あまりにも不気味で何かありそうなんだが……………」

「気にすんなって。」

「そうか。」

「ほらなんか見えたぞ。」

一樹達の目の前には大きなドーム状の穴があった。

「行こうぜ!!」

「あつちよつ馬鹿!!」

「へへっ俺が一番乗りだぜ!!」

ドムッ

一樹は何かにつかって倒れた。

「痛っ!!なんだよ。」

一樹が顔を上げると目の前には地上でみたのとは比べものにならない大きさのウォームが一匹いた。

「なっ ななな………なんだこりゃあああ!!」

「あの馬鹿野郎大声だしやがって。」

ガチガチガチガチガチ

ひととき大きなウォームが歯噛みした。すると周りから100は余裕で越えるであろうウォームの軍勢が現れた。

「逃げろこの馬鹿!!」

直後、粘解液の雨が降り注ぐ。

「うわああああ！……！！！」

「チイツ！！いでよ守護神ガラム。我らに加護を！！！」

すると、一樹を護るようにシールドが展開された。

「早く逃げるぞ、この馬鹿が！！！」

一樹はネフルに手を引かれて逃げた。

「ここまでくればいいか。」

「ありがとうネフル、助かった。」

「こんのつ、大馬鹿野郎が！！死にたいのか！！！」

「いや、死にたくないです。」

「だったら単独先行すんな！！わかったか！？」

「はっ、はい……」

「まったく……」

「それにしてもあいつなんだ？」

「あれが今回の目標だよ。クイーンウォームだ。奴を倒さない限り、ウォームは増える一方だよ。」

「……じゃあ盾みたいのは？」

「あれは神術だ。」

「神術？」

「そうだ。神の力だよ。まあ召喚獣みたいなものだ。ただし契約方法が違う。」

「違うってどんな感じに？」

「神との契約は寿命だ。命の契約だよ。」

「じゃあ俺のせいでネフルの寿命が……」

「違うよ。契約時に寿命を持ってかれるんだよ。」

「じゃあ大丈夫なんだな。」

「まったく人の心配してる場合か。……でどうすんだよ。」

「どうするって？」

「どうやってクイーンウォームのところまで行くかって話だよ。今のでだいぶ警戒してるはずだ。」

「正面突破!!」

ガスッ

「げぶっ!!」

ネフルに本気で殴られた。

「馬鹿!!まじめに答えやがれ!!」

「俺はいつでも至って真面目です。……じゃあこれはどうだ?」

「どうせまたくだらん思いつきだろう。」

「まあ聞けって、道がないならつくるんだよ。」

「はあ!?意味が分からん。」

「仕方ないな、穴掘るんだよ。」

「まあやる価値はあるかもな。でもどうやって?」

「そいつは俺に任しとけ。」

一樹達は穴を掘っていた。

「それにしてもその武器を使うとは考えたな。」

「馬鹿とネフルに言われるばかりが俺じゃないってことだよ。」そう、俺は自分のドリル状の武器を使って穴を掘っていた。

「まあそれでも馬鹿なことに変わりないがな。」

「うるさいなあ、少しくらいカッコつけさせてくれよ。ほらもつすぐ着くよ。」

「完全に開通するなよ。」

「分かってるよ。ほら着いた。」

俺達は再びクイーンウォームがいたドーム状の空間に壁一枚隔てていた。

「…でどうすんだよ、まだ周りにウヨウヨいるんだけど?」

「クイーンを一撃でしとめる。奴はウォームの司令塔でもある。奴を討てばウォーム共も混乱するはずだ。」

「具体策は?」

「なあに、簡単だ…」

そう言つとネフルがにやついた。

「おおなんだ教えてくれ!!」

「馬鹿を囋にする。」

「……………へっ?」

気づいたら俺の体はネフルに蹴り飛ばされて壁をブチ破りクイーンウォームにクリーンヒットしていた。いわゆる会心の一撃だ。

「ぐむお!!!」

「さあてとどめだ。必殺奥義いいいい!!!」

「ちよっ、待つて、また同じパターンですか?」

「狼牙一貫!!!」

ネフルが槍を投げると、クイーンの口に直撃して、体を突き抜ける。

「やったか!?!」

「いやまだだ。」

キシヤアアアーーーー

どうやらまだ死んでいなかったらしい。起き上がり襲いかかってきた。

「だが甘い、もう一発。」

そう言うと、ネフルが投げて壁に刺さっていた槍がネフルの元に戻っていきクイーンの体を再び貫く。

ガチガチ…ガチ…ガチ…ガチ…ガチ…チ

「やったみたいだな。」

「とりあえずな。」

「さて帰りますか。」

「ああそうだな。……………」

俺がネフルの方に振り向くと、顔が青ざめていた。

「ん？どうしたネフル。」

「……………うし……………うし」

「牛がどうしたんだ。」

「後ろだ！！！」

「後ろ？……………！？」

ガチガチガチガチガチ

倒したクイーンの死体の横にさらにでかいクイーンがいた。

「何だよこいつ。」

「もう一匹いやがったんだ。くそつたれが!!」

「もう一回奥義で倒せないのか。」

「私にそんなに体力が余ってると思ってか？」

「畜生！ここまでか。」

キシヤアアーーーーー

クイーンが俺に襲いかかったその時、クイーンの動きが止まった。

キ…シャ…アアア

「なんだ!？」

「奥義、獅子王拳」

見るとクイーンに拳を喰らわしている男が一人いた。

「炎焼波!!」

そうそこには一樹のよく知る人物がいた。

「お前は……」

「ヒーロー参上、だぜ。久しぶりだな、一樹。」

「竜司!」

そこには親友の姿があつた。

episodes:ヒーロー参上!! (後書き)

どうも作者です。プロローグ含め今回で四話目です。今まで読んでくださった皆様ありがとうございます。書き始めてはや1ヶ月。まだまだ未熟者ですがこれからも温かく見守ってくださいと、うれしいです。

episode 4 : 旅立ち（前書き）

本当にお久しぶりです。テスト期間や文化祭に追われてなかなか執筆できずにすみません。

大変長らくお待たせいたしました。

衝撃（？）の第四話開幕です。

episode 4：旅立ち

「竜司！」

俺の目の前に現れたのは親友だった。

「よお、元気してたか相棒。」

「元気もなにも、お前の方こそ大丈夫だったのかよ。」

「俺は大丈夫だけど、奴さんはご機嫌斜めみたいだぜ。」

「奴さん？…………。」

見れば壁や天井にびっしりとウォームが張り付いていた。

「どうすんだよ、竜司！？」

「俺に名案がある。」

「何だ！！勿体ぶらず早くしろ！！」

「一樹、あっちを向け。」

「？」

俺はとりあえず言われた通りに入ってきた穴とは反対方向を向く。

「で、どうす」

「悪く思っな一樹!!」

俺は竜司にブン投げられた。

「てめっ！親友売りやがったなあ!？」

「俺達親友だったけ？」

「ざけんなっ!!」

口ではそうは言っているけれど、言ったところで状況が変わるわけもなく、俺はウォームの群れの真ん中に落ちた。

「一樹、おまえのことは忘れない。…………一日ぐらい。」

「俺の犠牲はお前の記憶一日分か!？」

「さて、そこの姉ちゃん逃げるぞ。」

「一樹は!？」

「大丈夫、あいつは不死身だ。」

おい竜司、なに人様を勝手に不死身にしてくれたんだ。しかもネフル、お前は頼みの綱だったのに「そうなのか、じゃあ後は任せた。」

とか言ってるじゃねえよ！！とか思いつつ、竜司の背中を冷たく見送った。

ギシアアアアア！！

「はあ、こんなことになるなら来なきゃよかった。」

と愚痴ったそのとき、俺の裾からヒラリ、と紙が一枚落ちた。俺はできるだけウオームを刺激しないようにそれを拾い上げ読んだ。

「なになに、チュートリアル。その1、参加者は最初、一つだけ学力に応じた奥義が使えます。……………マジで！！！！？？？」

俺が驚きの声を上げた瞬間、

ギイイイシアアアア

ウオームを刺激したらしく、一斉に飛びかかってきた。

「クソッ！！こうなったらやけくそだ。いくぜ奥義！！！！」

そして発動した俺の奥義は

死んだフリ

あゝ死んだなこれ、うん。サヨウナラ、俺の短い異世界生活、そして行ってきます地獄に。

俺は半ば諦めつつ、全力で死んだフリ、
がしかしそんなことをした所で飛びかかってきたウォームの動きが止まるはずもなく、俺目掛けて強烈なボディプレスを喰らわした。

「ぐふお!!」

壁や天井すべてのウォームが飛びかかってきたから、俺の体は圧死寸前だった。

もう死ぬのか、俺。短い間だったけど楽しかったなあ…

しかしなかなか現実世界に戻らない。それどころか、体がみるみる軽くなっていく。

恐る恐る目を開けると、そこにはもうウォームはいなかった。
どうやらほんとに死体として見られたらしい。

今のうちに逃げる!!

そうして俺はゴキブリのように素早く地を這い回り、しびとく生き延び、無事巣を脱出した。

「滅ッッッッ!!!!!!!!」

村に戻って、俺はまず竜司の顔をブン殴った。

「落ち着け一樹。お前を捨てたのは悪かったと思ってる。」

竜司は寸前の所で俺の愛の鉄槌を受け止めた。

「反省するなら許し」

「次からはゴミはゴミ袋にまとめて捨てるよ。」

「話せよネフル!!俺はコイツの顔を埋まるまで殴ってやるんだ。」
ネフルに取り押さえられて、俺は仕方なしに冷静に竜司と話し合いをしてやった。

「悪かったよ、ジョーダンだよ、ジョーダン。…でどうやってあの
大群を抜けてきた？」

「ああ、服の裾からこんなんが出てきた。」

と言ってさっきの拾った紙を渡す。

竜司はそれを見てから一言

「…でお前の奥義ってなんだったの？」

「……………死んだフリ」

「……………すまん、よく聞こえなかったからもう一回言ってくれ。」

「死んだフリ。」

「もう一回。」

「死んだフリだよ！！死・ん・だ・フ・リ！！！！わかるか！？死体
のフリだよ！！」

「……………クッククク……………アーツハツハツハ！！死んだフリで
切り抜けた？ブッ！！傑作だの！！ヒーヒツヒツヒ！！」

「うるせえな！！馬鹿なんだから仕方ないだろう。」

「じゃあそんな馬鹿なお前にプチ情報。」

竜司はあらためて俺に向き直りまじめな顔で言った。

「この紙俺が作った偽物、ほんととは奥義なんて使えないんだよ。」

気がつけば俺は剣を抜いて竜司に飛びかかっていた。

「パラオ放してくれ、俺はこいつの腹かっさばいて、臓物を引きずり出さないと気が済まない。」

「勇者様、落ち着いてください。宴の最中に争いはよくありません。」

そうなのだ、巢のクイーンを倒して村に帰ってきてからというもの、村の人々には引っ張りだこで、俺のためにわざわざ宴を開いてくれたのだ。

さっきまでここにいたネフルもさっき子供に連れて行かれた。

「領主！！ちょっと来て下さい。」

「はい。では勇者様、ごゆっくり。」

そう言うと、パラオは呼ばれたほうへ行ってしまった。

俺はパラオがいなくなったのを確認して、竜司に向き直った。

「竜司、とりあえずお前にはここに至る経緯を教えてもらおうか。」

「そうだな、じゃあ俺の親父とお袋の出会いから話そうか。」

「長くなりそうだから遠慮しとく。今聞きたいのはこの世界に来てから今に至るまでの話だ。」

「えっと、どこまで話したっけ？親父がヤクザの鉄砲玉になって、刑務所に入って、お袋と運命の出会いを果たす所までだっけ？」

「うん、俺の話聞いてたか？それも気になるけど、今はこっちに来てからの話が聞きたいんだ。」

お前の両親なにもんだよ。と気になりながらも、俺はその気持ちを抑えてもう一度訪ねた。

「えっと、この世界に到着、いろいろあつて今に至る。」

「そのいろいろが聞きたいの！！」

俺はキレ気味に言った。いい加減つつこみも疲れたんだよ！！

「簡単に説明すると、隣村に着いた。お前の噂を耳に挟む。この村に着く。お前の話を聞く。お前の下へ急行する。今に至るって感じかな。」

「はしょったなあ。読者怒るぞ。」

「読者？」

「いや何でもない。気にすんな。」

まあ、きっと作者がいつか書いてくれるだろう。

「で、俺の親父が刑務所を出て、お袋と結婚して小さなカフェを経営し始めた所まで話したよな。」

「もういいよ！！その話は！！ってか重いよ！！」

そんなこんなでとりあえず俺達は、ネット世界での一日目を終えた。
この後続く強大な試練が待ち受けていることを知らずに……

episode 4：旅立ち（後書き）

あらためてもう一度、どうもすみません。

これからはできれば週一最低でも週二のペースで更新できるよう努力しますのでよろしくお願いします。

竜司の異世界にきてからの話は一樹の言った通りいつか書きます。物語の途中に書くかもしれないし、物語が終わってから書くかもしれないので楽しみに。

さて、別件ですが我が家は引っ越しました。執筆が遅れたのはそれも一種の原因かな？それで引っ越してみて一言

「案外大変だわ、引っ越し。」

なめてましたね。

引っ越した一週間は休まる暇がなかったですね。

まあ距離にして一キロくらいしか移動してないんですがね。

何故引っ越したか気になる方がいると思うので説明しておく、この前の地震で、だいぶボロくなっただので、追い出されましたね。取り壊すらしいです。

生まれてから育った場所なんで、なんだか寂しくなります。

まあ形あるものはいつか崩れるものだ。

思い出は心の中に……

とか言ってみる今日この頃の16歳です。

なんか書き始めてまともに後書きを書いたのは今回だけな気が……

まあ気にしない。

ということで次回はいつも通りインタビューなのか？

ゲストは誰なのか？

乞うご期待！！

では早ければまた来週、

バイ

episode 5: 修行

「一樹、じつちゃんの所に行くぞ。」

ネフルは一樹に端的かつ率直に告げた。

「いくつて、いつ、どこに、だれと、なにしに、なんで、どうやって？」

一樹はまだ寝ぼけているらしく、欠伸をしながら言った。

「今すぐ、じつちゃんの所に、私と、奥義を教わりに、強くなるために、歩いてだ。」

しっかりと一樹の疑問に答えたネフルだが、

「そう、じゃあいつてらっしゃい、おれにどねするからさ。じゃあね。」

さすがにこの一言には、しびれを切らしたのか、一樹を寝袋らしきものに詰めて、引きずっていった。

一樹が目を覚ますと、そこはどこかの広間だった。

「おお、起きたかのお。」

声ができるほうを向くと、そこには長い顎髭を生やした老人とネフルが正座していた。

「ネフル、ここどこ？……ってかあんた誰？」

そう言うと、ネフルは一樹を薄い板状の木で叩いた。

「じつちゃんに向かってあんたとは何事か！！このど阿呆！！」

「ほっほっ、面白いやつだのお、こりや骨が折れそうじゃなあ。」

一樹は頭に手を当て朝の会話を思い出す。

「じつちゃん……じつちゃん……じつちゃん……ここって、ネフルの実家？」

「正確に言うなら私の師であり私の祖父、ネイバス・ヴィラの道場だ。」

「道場……」

一樹はその言葉を聞いて疑った。なぜなら、道場なら門下生の一人や二人いてもいいのに一人もないし、内装が道場というより、寺というイメージを与えるものだったからだ。

「そうか、でなにしにきたの？」

一樹のばかげた質問にネフルが頭を抱える。

「修行以外になにがある。というかおまえのためにわざわざじつちやんに来てもらったんだ。自覚を持て！！」

「あっそ、まあいいや。」

「よくない！！」

一樹は無視して続けた。

「ところで、竜司のやつがいないみたいだけど……どこにいるんだ？」
「あいつはどっか行っちゃったよ。なんか『俺には俺の道がある！』とか言ってたよ。あとお前に伝言で『必ずお前の力になる！だからおまえも死ぬんじゃないやねぞ！！』だとさ。まったく勝手な奴だ。」

ネフルは呆れ顔で言った。

「そっか、わかったわ。」

一樹の姿はどこか寂しげだった。

「よし、状況も把握したことだし、その修行とやらを始めますか。」
しかし、寂しげな表情を見せたのは一瞬で、何かを振り切るようにしてそう言った。

「やけにやる気だな。」

ネフルが悪態をつくど、一樹は笑って言った。

「あいつに死ぬなって言われたしな。」

「そんじゃ、行くとするかのお。」

「うつしゃ！……ところで行くってどこに？」

「修行場所に決まってるだろ。」

「ここでやるんじゃないの？」

「こんなとこで始めから修行する訳ないだろ。お前みたいなペーペーには基礎の基礎から叩き込む。ほら行くぞ！」

「めんどくさい、……ネフルさん？首根っこ持ってどうするつもり、ちょ、まっ、首がつ、しまっ、死っ！！！」

ネフルに連れられて着いた場所は滝壺だった。

「なに、コレ？」

顔を青ざめながら、一樹は答えた。

「滝。」

「いやいや、ネフルさん『滝。』じゃないすよ。なにをしろと！？」

「修行。」

「ネフルさ〜ん！」

「まあまあ、そう意地悪いことを言うてない。一樹君と言ったね。」

「はい。」

ネイバスは一樹に確認すると修行の内容を告げた。

「君にはあの滝をはじめてもらう。」

「はい！？いや無理でしょ。」

一樹は驚愕の声をあげていた。

「大丈夫じゃよ。なに、簡単なことじゃよ。生命力を上手く使えればな。」

「その生命力が使えないんですが……」

「まあ落ち着きなされ、深呼吸三回。」

一樹は言われた通りに三回深呼吸をした。

すると不思議と心が静まる気がした。

ネイバスはこう続けた。

「よいか、生命力というのは心、技、体、が揃って始めて作り出せる。ここで言う心は心の強さ、安定。技は集中力。体は書いての通り体力じゃ。これらはどれが抜けても生命力は作り出せない。」

ネイバスはどこからともなくだした杖を使い地面に心、技、体と書

いていく。

「体力が無ければ生命力は作り出せない、集中力が低いと上手く生命力が使えない、心が強くないと生命力が安定しない。」

書くだけ書いて満足したのか、ネイバスは腰を下ろす。

「だからお主にはどんな状況でも集中して」

「面倒だから、ちゃっちゃんとやろうぜ。」

一樹はネイバスの話を聞かずに滝に歩いてゆく。

「しかし、理論がわからんと奥義は無理じゃ。」

「うるさいなあ、じっちゃん。要はこうゆうことさ。」

一樹が手を上にかざすと、滝の水が一樹の上をドーム状に流れた。それどころか、滝壺の水まではじいてそこが見え、中にいた魚がビチビチと跳ねていた。

「なっ……」

ネイバスはまさに開いた口が塞がらなかった。

（とんでもない奴じゃ。いとも簡単に生命力をものにしておった。あやつならもしかしたら……）

「じっちゃん！―どうなの合格!?!」

ネイバスは一樹の言葉にで我に返る。

「ああ、合格じゃ。」

「よっしゃー!!」

「じゃあ次のステップに進むかの。」

「次なんて惜しみだしないで、ラストまでやっちゃおうぜ。」

「そうじゃのう、お主召喚戦士じゃったな。」

「ああ、そうだよ。」

「じゃあ、こいつらと契約したら修行第一段階終了。いでよ、黒竜
ガイスと白龍クライヴ!!!!!!」

ネイバスが地に手を当てて、その名を叫ぶと黒い地竜と白い天龍が
地中と天空から現れた。

「契約方法は、簡単。胸にある水晶に生命力を吹き込むだけ。正規
契約だから、もちろん契約したらお主の召喚獣になるぞ。ああそう
だ、一つ言い忘れていたが、そいつらちよつとやさつとじゃ傷つか
ないから、本気でやらないと死ぬぞ。そんじゃあがんばって。」

ネイバスはそう言うのと足早に去ってしまった。

一樹は見送る暇も無く、ガイスとクライヴの挟撃を受ける。

「クソッ!!」

一樹はその場を何とか切り抜け、勢いで剣を抜く。

「はあああああ！！！！！！」

気迫と共にガイスに切りかかるが、

バキンッ

嫌な音が鳴り響き剣が折れる。

間髪を入れずに、ガイスの振り向きざまの思い拳が、一樹の身体にめり込む。

一樹の肺から空気が一気に吐き出される。

「……かはっ！！」

滝壺近くの崖にぶつかり、一樹はやっとのことで息を吸い込む。しかし、目の前には、口を開いたクライヴが待ち構えていた。

（やばっ！？）

クライヴは開いた口から吐き出した白炎に一樹が包まれる。

だが、白炎の中で一樹は生きていた。

咄嗟の判断で生命力を前に展開して盾にしていたのだ。

しかし、同時に一樹は困り果てていた。

（どうやって、懷に潜り込むかが問題だな。この状況も長くは続かない。奴らに注ぎ込む生命力も温存しなきゃならない、どうする！？）

白炎は収まる気配がない。

ここで一樹は一か八か賭に出た。

一樹は手を地面に当て、身を滝壺の方へ翻した。

すると、白炎は崖に激突して崖の岩を溶かした。

その隙に一樹はさつき拾っていた砂をクライヴの顔めがけて投げつける。

狙い通り、クライヴの目に砂が入り、混乱する。

一樹はこの一瞬でクライヴの首もとに近づき、胸の水晶に生命力を注ぎ込む。

すると、クライヴはその水晶に吸い込まれ、白い掌に収まる大きさの、白い水晶になった。

クライヴがいなくなったことに気付いたガイスは激昂するかのよう
に吼えていた。

（あと一体！！）

一樹は次にガイスに向かって走った。

ガイスは口から黒い雷を放つ。

一樹はこれも生命力の盾で受け止める。

ガイスの攻撃は止まなかった。

しかし、ガイスが攻撃をしていたのは、一樹が
生命力で作った盾の後ろにあった木だった。

一樹はガイスが攻撃を出した瞬間、一瞬だけ雷を受け止めた。

ガイスが自分の攻撃で視界を奪われている間に、足に生命力を集約
して、高速移動してガイスの胸の下に移動していた。

ガイスもそれに気付いて口を下に向けるが時すでに遅く、クライヴ
と同じように黒い水晶になった。

「終わった……。」

一樹はそう呟くと、その場に倒れ込んだ。
こうして、修行の第一段階は終わりを告げた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7189s/>

LEGEND KNIGHTS

2011年10月8日04時34分発行